

松下 うおやま先生の漫画を読んで本当に感激して：ファンなんです(笑)。

うおやま それはありがとうございまず(笑)。

松下 今号の特集テーマが「心の多様性」なんです、これはもう先生に頼むしかないと思ってます。先生の漫画は、例えばマイノリティとかそういう視点ではなくて、登場人物一人一人が「かけがえのなさ」を持っていて、その一人一人の生きている姿がすごく丁寧に描かれているところがすごいというか、そんなふうに多様な、いろんな「色」を持った人たちが会って、関係ができて、世界が広がっていく様子を描ける人がいるんだと思って、とても感動しました。

うおやま 確かに多様性については、描いているうちに意識するようになってきたかもしれないですね。ただ、最初から意識していたわけではなくて、『ヤンキー君と白杖ガール』(以下、『ヤンガル』)を描き始めたのは弱視のことを知ってほしいということが

まずありました。でも障害のある人を描くからといって、その人が特別であるというふうには読んでほしくなかったんです。自分の父親が後天的な弱視なんです、自分にとつては「父」であり「人間」であって、特に「障害者」という目では見てませんでした。だから、「障害者が主人公の漫画」と聞くと、自分とは関係ない人の話で、頑張っている姿を見て感動する話だ、と色眼鏡で見られることが多い気がします、そうではなくて「障害者」も自分と同じ人間であるというふうに見てもらいたいという思いがありました。

で、実際に描こうとすると、弱視の主人公を感じる生きづらさを「障害者」のみの話ではなく、社会全体をとらえて描く必要があるとだんだん気づいてきました。障害以外にも皆いろいろな事情を持っていて、それこそ多様な、それぞれ人が抱える悩みとか苦しみとか、家庭環境の問題だったり引きこもりだったり、そういうふうな様々な生きづらさがある。誰もが「当事者」であり、それ

は、個人以上に社会全体の問題なのではないか。弱視だけにとどまらず、他の様々な生きづらさもいっしょに並べて描かないと、他人事で終わってしまわないかということに、だんだん描いているうちに気づいてきて、多様性を描くことを意識する

ようになったという感じですね。

今、多様性が大事と言われていても、障害者やLGBTQを自分とは違う別の世界の人だから理解し合えない、とするのではなくて、「自分も含めていろんな人がいる」ということをまずは理解しようみたいな流れがあるんじゃないかと思えます。**松下** なるほど、そういう理由があったんですね。最初から多様性に



© Uoyama/KADOKAWA

巻頭対談

Uoyama

うおやま

Himeka Matsushita

松下姫歌



街を牛耳る最恐ヤンキー 黒川森生
© Uoyama/KADOKAWA

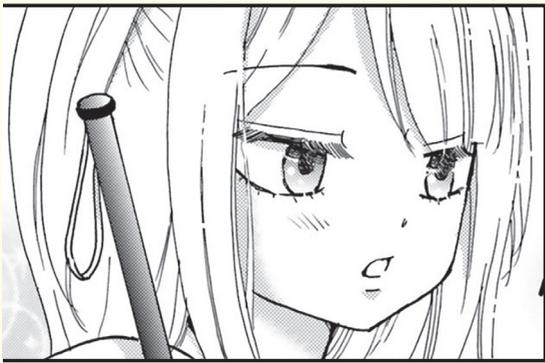
いて意識されているのかなと思ってました。『ヤンガル』だと、登場人物の名前に必ず色が入っていたり、町の名前が「虹町」だったりしたので。

うおやま いや、そんな意識高くはなかったです(笑)。色についても全部偶然ですね。

松下 そこが偶然なのも面白いですね(笑)。『ヤンガル』では、ヤンキーの黒川君が弱視のユキコさんに出会うことで、彼女の見ている世界とどうか、黒川君にとって新しい世界を知って彼が感激するというシーンがありました。実はこういうことで、心理臨床をやっているクライエント(相談者)に会うと、すごく感じることもなんです。いわゆる「普通のお母さん」に見えても、自分が知っているかと思っている「お母さんの世界」とは違うということが、話

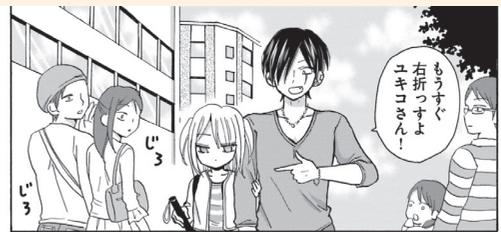
を聞かせてもらうことで初めてわかったりします。私たちは何か知らないうちに同じ世界の中にいるように思ってしまうところがあるけれども、実際には一人一人が、その世界の中で体験していることも見えていることも違って、出会いを通してそのことがわかるのが私自身はすごく面白いと思っていますところなんです。

うおやま そういう自分と違う考えや環境にいる人と出会って、そこで理解しようとするかどうかが多様性社会の大変なところですよ。今はSNSを通して、本当に自分の知らなかった立場の人たちの情報がいっぱい入ってきて、そういうマイノリティの人たちが自分たちの権利を認めてほしいと主張しているじやな



盲学校に通う弱視の少女 赤座ユキコ
© Uoyama/KADOKAWA

いですか。障害者の方だったら「車椅子でも駅を使いやすくしてほしい」とか、何かそういう声を上げるたびに「わがままだ」とか「少数派がうるさい」とものすごい反発が起きてますよね。そうではなくて、相手にも大変な事情があるとか、自分も持っているけれども相手は持っていないものがあるんだということを知って、やっぱりその権利を認めていかないといけないと考えた方がいいと私は思っています。難しいことかもしれないけれど、これが今の社会の一番の課題のような気がしますね。



© Uoyama/KADOKAWA

多様性を社会が受け入れるということ

うおやま 障害者についての本を読んで歴史を学んだんですが、車椅子の人がバスに乗れるようになるまでの道のりの大変さとか、もう放っておいたら永遠に乗せてくれないので、半ば無理やり乗り込んでいくんですね。そうすると乗客からものすごい罵声を浴びせられて、そういうことを経てようやくバス会社が対応するようになったとか。結局、放っておくと進まないからマイノリティの側が自分たちで動いてきたという歴史

がずつと続いてきたんですね。
松下 そのあたりの難しさはどうして起きると思っていますか？

うおやま 海外だとデモとかストライキで国民の意思を示すことがよくある印象ですが、やっぱり日本人はおとなしくて従順すぎますよね。あと、基本的に怒り方がわからなくて、結果として上の言うことに従ってずつと我慢している。そしてあるときに、勇気ある人が「もう我慢ならんぞ」と立ち上がって、それでやつと物事が動くところがあります。

一方で、日本はデモがやりにくい国でもあって、何か行動を起こすとすぐに「デモなんかするな！」と周りから反発を買うところがありますよね。他にもいろいろ難しさはあると思うんですけど。

松下 やつぱり社会というか、そういう大きい括りになると同調圧力的なことも出てきますよね。でも、個々の人になったときには、さつきおっしゃったみたいに、自分の知らなかった価値観であったり、世界であったり、事情であったりを知って「そうなんだ」というふうになる人もいれば、何か反発を感じる人もいます。

うおやま すぐに受け入れられない

人がいるのはしょうがないところはあると思うんですが、でもやつぱりそこを一步進んで、理解というか、世の中にはいろんな人がいるんだというだけでも気づいてもらえないのかなと思いますね。理解するのは、それはそれで難しいのかもしれないので、こういう人もいるんだということをずつと漫画では描いてきました。いろんな事情があるというのを知ることが大事だという、それこそが多様なのかなと思います。

「障害者」という言葉が持つイメージ

松下 作品を作っていく中で多様なキャラクターというのは、どういふうに生まれて来るものなんですか？

うおやま 意識して考えるというよりは少しずつ地道に広がっていった感じですね。『ヤングル』の場合はまず主人公の二人がいて、ユキコの方にそのお姉ちゃんが出てきて、黒川君のライバルとして獅子王さんが出てきて、お姉ちゃんの方には「家族のしんどさ」を描くという役割があつて…という感じです。障害者の仕事のこと描きたかったのユキコのバイト先の人もいろいろ考

えたりしました。ただ、弱視の子が職場に適応する大変さを彼女だけの問題にはしなくなかったので、バイト仲間に同じように適応できていない引きこもりのキャラクターを出して「皆にとって働きやすい職場とは」を考えたり、障害者雇用に理解を示す店長も出てくるんですけど、生まれながらに善人キャラだと都合が良すぎるので、本人の過去の体験があつて今があるというふうに描いたりしました。

松下 なるほど。弱視であることによってどういう問題や難しさがあつたりするのか、そしてどういう人と

どういふところで出会っていくのか、実際の社会の中では、いろんな人と出会っていく中で理解をされたり、されなかったりもするわけですよね。読者の側も、身の周りに弱視の人がいたりする人もいれば、会ったことはないけれども、そういう人がいることを知って、ちよつと親身になつて考えることができるようになったりとか…。

うおやま 実際に弱視の知り合いはいないかもしれないけども、漫画に描くことによって「0が1になる」といふか、「今までまったく意識していなかったけれども、こういう人



© Uoyama/KADOKAWA

もいるんだ」というふうにも思っても
らえるだけでも全然違うと思ってい
ます。私自身も知らないことがたく
さんあるけど、知らないのと本当に想
像することもできないので、漫画で
出会ってちよつとでも知ってもらえ
るきっかけになったらいいなと思っ
ますね。

実は私、自分の父親のことを「障
害者」だと漫画を書き始めるまで思
っていないかったですよ。なぜかと
言うと、父は当時、障害者手帳を持
ってなかったんです。ただ一緒にいて
書類に字が書けないとか一人で買
物するのが難しいとか、いろいろ大
変なことがあったんですけれども、
私は「障害者」だとは思ってはなく
て、「すごく目の悪い父」だとい
うふうに思って生きてきました。だか
ら、テレビで障害者を取り上げられ
たりしていても、父とは全然結びつ
いていなかったんです。意外とそう
いう感覚の人っているかもしれない
ですよ。障害者である前に父であ
ったり身内だったり友達であったり
するという、「障害者の前にまず人
間なんだよ」という感覚をどうにか
して伝えられないかなと『ヤンガ
ル』を描いているときはずっと意識
していました。

一方で、反省するところもいつは
い出てきて、「障害者」という言葉
にすごく固定的なイメージを自分は
持っていたんです。

松下 固定的なイメージというのは？

うおやま 例えば、白杖です。ヤン
ガルを連載する前、白杖を持って
いる人を街中で見かけると、「あっ、
視覚障害者の方だ」と思っていたん
です。目が見えにくいという点で
は父と一緒になんですけど、父は白杖
は持っていませんでした。なので、
白杖を持っているだけで「障害者」
というカテゴリーに無意識に入れて、
何となく違う世界の人だと自分は
思ってしまったって。父のことは
「人間」だと思っているのに、他人
のことは別の世界の人だと感じてし
まう。そういう矛盾や偏見がまず自
分の中にあっただけです。その矛盾が
不思議で、解消しようと思っ
て、一生懸命描いたというのはあり
ます。

松下 例えば、医学的にどうい
う性質の問題で、どういう治療方
針を取るときかを考えるときには
その概念自体は必要だと思っ
てますが、じゃあ、その「〇〇障
害」がその人に本当に当てはまる
のかは疑問ですよ。

実際は、一人一人異なるいろんな人
がいて似ている部分を一つの言葉で
括っているだけで、実はその括りの
中に多様性があるはず。発達障
害」という言葉が一般に知られる
ようになりましたが、発達障害の診
断を受けた人に対して「障害受容は
できているのか」といった議論の
ときに、実際のその人に当てはまる
症状や課題だけでなく、診断ラベル
の方を見て、その人には当てはまら
ないものまでひっくるめて云々され
るように感じることも多くて。

うおやま あらゆる障害にそういう
問題がありますよね。視覚障害者と
聞くと大体の人はまったく見えない
全盲を思い浮かべるんです。でも
実は、人によって見え方がめちゃ
くちゃ違って。『ヤンガル』が当
事者の方にすごく喜ばれたのは、弱
視を取り上げたのが珍しかったこと
もありましたが、本当はちよつと見え
ている人がいたり、ぼやけて見えて
いる人もいれば、視界の一部が欠け
ている人もいます。そういうふうに見
える／見えないの間にグラデーショ
ンのようにいろんな見え方があるこ
と自体がまず知られていなくて、そ
の部分を描いたところでした。
例えば、発達障害ならじつとでき

ない人なのかとか、聴覚障害だっ
たらまったく聴こえないのかとか、
車椅子の人だったら全然歩けないの
かなとか。実はそうとは限らない。
障害の違いもあるし、程度の違いも
あるし、人間だから人格の違いもあ
って、そのあたりを雑にカテゴリー
分けしてしまうと、たくさん誤解
を生んでしまうように思います。

漫画の理想と生きている現実

松下 人間って知らなかった世界と
触れ合っていくと、それが喜びにな
ったりもするし、逆にその世界に入
るのが怖かったりもすると思うので
すが、うおやま先生の作品の中では、
それぞれの人が大事に出会ってい
く感じがすごくするんですね。もち
ろん出会うことの難しさとか、家族だ
からわかるところ、家族だからそ
向き合いにくいところもきつとある
はずで、わかり合いたくてもなかなか
かわからなかったり、すごく難しい
こともあったりするのかなと思っ
てます。

うおやま 漫画で描いていることは
あくまで理想で、現実はこのな
まくみんなが理解し合うことは難
しいよなあと思いがちで、でも「こ

なつたらいいな」ということを描いておくのも大事だろうと思っていま
す。理想というか目指したい社会を
描いておかないと、どこを目指した
らいいかわからなくなるということ
もありますね。現実社会では、家族
が理解し合えなかつたりとか、孤独
だつたりとか、親との関係もいろい
ろありますし、その中で自分がより
生きやすくなるにはどうしたらいい
かを自分の頭で考えるしかないです
ね。

ただ、孤独はいけないと言うけれ
ども、一人の方が楽な人もいるし、
そういう人は無理に友だちを作らな
くてもいいと思うんですね。最新作
の『日向さん、星野です。』は引き
こもりの女の子が主人公で、どっち
かと言えば、「二人でいてもいいよ」
という気持ちがちよつと入ってます。
前作の『ヤンガル』では人と人の
理想の繋がりを一生懸命描いて、で
も、どこかでやつぱり、そんなに繋
がりがある人ばかりではないだろう
うと思つて。現実ではそんなに
うまくは行かないだろうし、人と繋
がらなければダメと言われたら辛い
人もいるのかなと。今の社会は個々
を大事にしているような感じもある
ので、そこは自分でもちよつと揺ら

いでいますね。みんなと繋がればい
いとは言い切れない、人によつて違
うだろうということは思います。

松下 それこそ「コミュニケーション障
害」がある種、ある種のやり方での
コミュニケーションのうまさがない
と、そういうふうには呼ばれたりする
んですけれど、人との関わり方や繋
がり方って常に丁々発止と言葉のキャ
ッチボールができることだけではな
いですよ。黙っているけれどもその
場に一緒にいられたりとか、離れ
ているけれども何か居場所感を持つ
ていたりとか、いろんな参加の仕方
があつたりしますし。

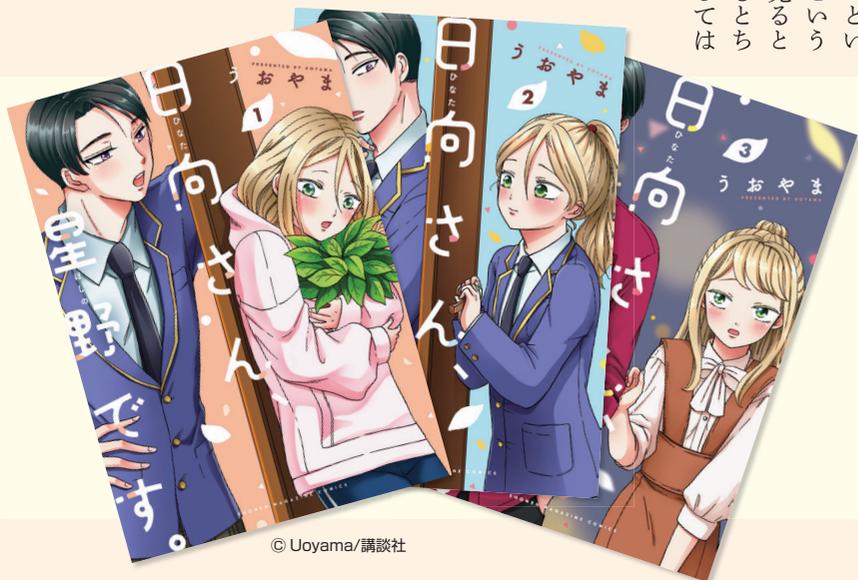
今、聞いていて思い出したのが、
これは本（『ネガティブ・イメージ
の心理臨床』創元社）にも書いたこ
となのですが、私が自閉症のお子さ
んと初めて心理療法で会つたときに
目が全然合わないし、自分が一緒に
いることを認識してくれているのか、
ちよつとよくわからなかつたんです
ね。最初の頃、その子が毎回、部屋
をわーっと走つていって、私はその
後ろを付いていく、というのを繰
り返していたんです。何回かそれが
続く中で、ふと「この子は自分の存
在を感じていないのかな」と寂しく
なつて、ちよつと足が止まつてしま

つた瞬間があつて。そうしたらその
子がピツと止まつてくれたんですよ。
それで「ひよつとして」と思つて、
私がまたちよつと走つたら、その
子もちよこつと走つて。ああ、私の
ことをその子はちゃんと感じてくれ
ているんだと思ひました。それで、
よく考えてみたら、目をわざわざ合
わせないと、こつちを向いてくれ
ないというのは、私が「いる」とい
うことをすでにわかっているという
ことですよ。だから、目を見ると
かそういう接点の持ち方をするとち
よつとしんどいから視線は外しては
いるけれども、この子は一生
懸命、私と一緒にいようとし
てくれてたんだ、と気がつい
たんです。そうなると関係性
も変わつてきて、ベタベタと
くつつくようになつたり、少
しずつしゃべつてくれるよう
になりました。

先ほどの障害者の話もそう
ですが、どこかで知らず知ら
ずのうちに持つているイメー
ジがあつて、最初はやつぱり
自閉症の子どもだから目が合
わないと思つてしまつていた
自分がいたように思います。
でも、実際に会つてみると、

そのイメージの裏側というか、生き
て関わり方としてくれてるその人
の心があるんだというのを感じまし
た。

うおやま そのお話も、ちよつと関
わつただけだつたら、「人が嫌いな
子どもなのかな？」で終わつてしま
つていたはずで、そこまでちゃんと
関わりを持つとうとしてきたからこそ、



そういうことがわかってきたところ
がありますよね。もつと深く付き合
ってみたら、人とは違うコミュニケ
ーションの取り方があったというか
いわゆる「普通」と言われる人や一
般の人とは違う愛情表現があったり
とか。だからこそ、この多様性社会
の中では自分の思い込みでなく、
知識を増やすことが大切だと思いま
すね。

松下 障害もそうですが、何かそう
いう専門的の知識をまずは仕入れる
みたいなところは仕事上あるのです
が、それにハマってしまつて、それ
こそ「今生きている本人」を見ずに、
知識を被せて見てしまつてること
もまた起こりがちに思います。難しい
ですけど、やっぱり生きて関わると
いうことが大事なんだなと思いま
すね。

うおやま 漫画家って本当に人と会
わないので（苦笑）、私の場合はそ
んなに生の人と関わっているわけ
はなくて。だから、本当は現場にい
る人が一番偉いと思いつつ、理想論
を描いているというか、頭で考えた
理想を言っているだけなので。でも、
自分の頭で考えることも大事だと思
っています。なかなかみんながみん
な直接関わられるわけではないから、

やっぱり多様性社会になっていく流
れの中で、世の中にはこんな自閉症
の人がいて、発達障害の人がいて、
LGBTQの人がいて、〇〇の人が
いるんだというふうには、今はそうし
たことがようやく可視化されるよう
になつてきたと思うんですよ。

でも今度、そういう自分とは違
う人がいっぱいいて、どう理解し合
えばいいんだみたいなことがありま
すよね。分断が起こつたり、むしろ
分断が進んでいるような感じがして
います。一言で多様性社会といつて
も、みんな同じ人間なんだよつて、
どういうふうにしたら感じられるん
だろうというのが課題かなというふ
うに思います。

松下 その中でやっぱり大事なものは、
自分を大事にするじゃないですか
でも、先ほどおっしゃつていた自分
がどうあれば生きやすいかというこ
とですよ。

うおやま そうですね。自分を大事
にした方がいいと思います。何か自
分が生きづらさを感じたときに、ま
ったく見当違いの敵を作つて弱い人
に矛先を向けているケースも結構あ
るので。障害者の方に八つ当たりす
るとか、視覚障害者の方を急に蹴る
とか。そういうのって自分のイライ

ラを弱い人に向けてしまふから起こ
るんですが、なんで自分がイライラ
しているのか、その原因を考えた方
がいいと思うんですね。社会に問題
があるのかもしれないとか。やつぱり
自分がどうしたら生きやすくなるか
というのを考えるのは大事なのかな
と思います。

心が疲れていると生きていけない

うおやま 一方で、政府は政府で本
当に弱者切り捨てというのか、私は個
人事業者なのでインボイス制度の影
響を受けるんですが、あれはエンタ
メ業界だけではなくて、一人親方と
か個人のお店とか、細々とやつてい
るようなおじいちゃんおばあちゃん
にも降りかかつて来ることなんです
ね。あと、もつとわかりやすい例だ
と、マイナンバーカードによる紙の
保険証の廃止問題とか、うちの父み
たいに目の不自由な人間は非常に大
変です。暗証番号を入力できなかつ
たり、高齢の方も、自分で更新に行
けないとか。残念ながら『ヤング
ル』を描いた四年前よりもそうした
状況は悪くなつていっていると見て、
弱者がより生きにくい社会になつて
きてますよね。デジタルが使える人

と使えない人の格差もそうですし。
松下 日本の場合、もうすでに超
高齢社会なわけで、高齢者の方にと
つていふんな意味で生きやすいとい
うことが大事ですよ。

うおやま 結局、高齢者や障害者の
方が生きやすい社会は、みんなが生
きやすくなると思うんですよ。『ヤ
ングル』で描いたのが、障害のある
人が働きやすい職場はみんな働きや
すいということなんです。弱い立場
の方に合わせている社会の方が、絶
対みんなにとって便利になるんです
けど、今はできる一部の人に合わせ
ている感じになつてきているのがち
よつと不安です。

しかも障害者や高齢者だけではな
くて、だんだん国民全体が弱者のよ
うになつてきているなということも
思っています。インボイス制度も保
険証廃止も、本当にたくさんの人に
影響する問題なので、みんながいっ
しょになつて不便で生きづらくなつ
ていきますよね。そうになると、お金
や不便さの問題ももちろん大変なん
ですけど、そうやって生きづらくな
つてくると、心の方も「生きる気
力」を削がれていくというか。やつ
ぱり人は疲れていると生きていけな
いですよ。だからなるべく生きてい

くことにハードルを置かない社会であってほしい。私の親が心理職をしているというのもあるんですけど、心理学や心理職の大事さというのはすごく感じていきます。何か病気になることも、実際の治療と同じぐらい心のケアもお願いたしたいと思っています。最近だと、病院にカウンセラーを置いたり、心のケアについても診るようになってきてますよね？

松下 医療の現場で心理職が求められているところはありますね。今は医療技術の進歩によって、一昔前だったら生き延びることがまず大事だった難しい病気でも治すことができるようになってきたり、病気自体はそんなに気にしなくてもやっていけるようなレベルになってきていますが、そうなるにつれて今度は心理的なケアが必要になってきたり、病気を持ちながら生きていくことを支える仕組みが必要になってきます。病院によってどこまで対応できるかは差がありますが、やっぱり必要とされていると思いますね。

うおやま 病気のときってすごく不安になるので、お医者さんには優しくしてほしいですよ（笑）。しかも一対一で先生と向き合っていると孤独なので、そんなときに心理職の

人がそばにいて話を聞いてくれるととても助かります。

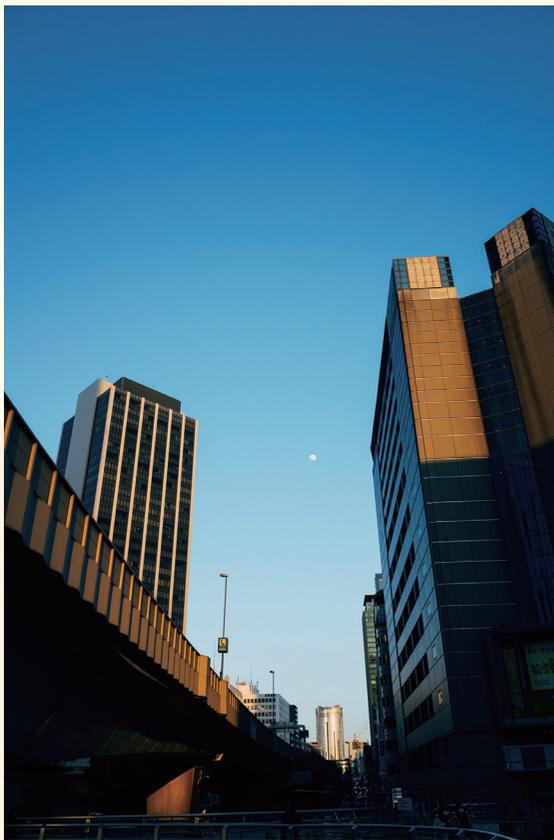
小さい頃から意識することの大切さ

松下 世の中の動向というか、漫画を描く際のソース（情報源）はどこから得られているんですか？

うおやま SNSやNHKの「Eテレ」とかが多いですね。「Eテレ」って福祉系や社会問題のドキュメンタリーがすごく充実しているので。マイノリティの方が出てくる番組も常にやっていますし。そういうもの

を観たり、ネットで話題になっている社会問題とか、いろんな意見が飛び交っているのを見て、「今はこういう流れなんだ」ということを取り入れるようにはしています。

あと、実は、気がつかないうちにすでに様々な当事者に出会っているんだらうと思います。小学校のときとか、目に見える障害だったらわかりませんが、発達障害の子なら教室にそれっぽい感じの子がいたなあとか。あのときは知らなかったけどLGBTQの子も実はいたかもしれないとか。マイノリティと言われる立



場の人が身近にいたことがわかったのは、私の場合はだいぶ大人になってからなので。さすがに白杖を持つていけば気づくと思うんですが、目が見えにくい子もいたかもしれない。学校に来ていない子もいたし、おそらく出会ってはいいても、その中に抱えているものに自分が気づけなかった人も今までにたくさんいるだろうと思います。

松下 障害を持っている人として見ているのではなくて、初めにお父様の例でおっしゃっていたように「その人」として出会っていると、そういう世界があることに気づけなかったりするかもしれないですね。自分が当たり前だと思っていたことが違ったり、相手はすごく困っていたのにいろんなことを押し付けてしまっていたり。そういうことが少しずつでもいいから、自然にわかっている方がいいなと思います。

うおやま もっと小さいときから自然といろんな事情を持った人と触れ合う機会があったらいいのかもしれないですね。子どものときの方が知識がない分、自然に触れ合うことができた友だちになれたりすることは絶対あると思うので。多様性についての教育とか、私が小さいときよ



りは今の子どもの方がより進歩していると思いますし。
松下 確かにそうですね。下手をするとか眼鏡をかけることに繋がる面もあるけれども、実際には子ども同士って子ども同士の関係性やつなが

りがあつて、いじめが起こつていたとしても状況をよく見ているんですね。一人一人の子どもの話を聞くと、そのことがとてもよくわかります。やっぱり周りの大人が、そうした子どもたちをどうホールドできるのかというところが今は問われている気がします。

うおやま 今の子どもは、おそらく私の頃より多様な社会に馴染んできているのではないかと勝手に期待していて、逆に今の大人の方が固定観念に縛られて、まだ時代にちよつとついていけないというか、今まで培ってきた常識を変えるのが大変なのではないかとも感じています。常識って本当にどんどん変わつていくものなので、漫画を描くときもそうなんです。時代に置いていかれるんではない漫画になるんです。テレビのタレントさんもそうですが、古い考え方の人とか出てくると見ていられないし、今の若

い視聴者に拒否感を持たれてしまうようになってますよね。意識って本当にアップデートしていかないと、もう古臭い漫画になっちゃうんですよ。そういう意味で、やっぱり古いままではダメだという意識が自分にはあるし、個人的にもやっぱりそういう人間でいたくないという思いもあるので。ただ、私もそもそも社会派の話を描こうと思つて漫画家になつたわけではなくて、もつと気軽に、何も考えなくても楽しめる漫画も大事だから、そういうふうなものを描くのもいいのかもしれないとは思つてるんですけど。

松下 私はうおやま先生のことを社会派とは思つてなかつたですし、最初に申し上げたように、本当に一人一人の登場人物の素朴な感覚を描きながら、私たちの心が知らず知らずのうちに求めているもの、何か頭で考えて「これ」と思っているのではなくて、自然に「ああ、これが欲しかったんだ」というように心が欲しているものを作品の中で示してくれているように思います。

うおやま 私の漫画を読んで、読者のみなさんにそういうふうに通じていただけるの嬉しいですし、やっぱり自分は、漫画は読者さんへの手紙

みたいな感じで描いているところがあるの、いろいろな形で受け取ってもらえると嬉しいですね。障害者やマイノリティのことも漫画を読んだりドラマを見たり、もつと小さいときから触れていれば、もつと意識することができたと思うので、そういう意味で漫画が何か手助けになればいいなとも思っています。

うおやま

2013年漫画家デビュー。2018年より弱視のことを知つてもらうため弱視の盲学校生を主人公とした漫画「ヤンキー君と白杖ガール」をWebサイトで個人連載する。全8巻。2021年に日本テレビにて「恋です!」ヤンキー君と白杖ガール」のタイトルでドラマ化。2022年より引きこもりの少女を主人公とした漫画「日向さん、星野です。」を週刊少年マガジンにて連載。2023年9月14日に最終4巻が発売予定。

松下姫歌(まつした・ひめか)

1968年兵庫県生まれ。京都大学大学院教育学研究科博士後期課程修了。博士、教育学、臨床心理士、公認心理師。現在、京都大学大学院教育学研究科教授。専攻は臨床心理学。主な著書に『ネガティブ・イメージの心理臨床』『心的現実感と離人感』(創元社、単著)『心理療法における「私」の出会い』(創元社、共編著)、『バウムの心理臨床』『発達障害』と心理臨床』(創元社、共著)などがある。